

平成27年度[第19回] 文化庁メディア芸術祭 アート部門9/9(水)まで作品募集中 審査委員から届いたメッセージをご紹介します。 <http://j-mediaarts.jp>

文化庁メディア芸術祭では、9月9日(水)18:00まで作品を募集しています。

アート部門には、テクノロジーとともに新たな価値観を探り、批評的な視点をもつ様々な表現が集います。審査委員には、国立国際美術館主任研究員の植松由佳氏、視覚的イメージを広範囲に研究している視覚文化研究者の佐藤守弘氏のほか、画家・映像作家の石田尚志氏、美術家中ザワヒデキ氏、アーティストの藤本由紀夫氏が新たに加わりました。インタラクティブアート、映像作品、映像インスタレーション、グラフィックアート、ネットアート、メディアパフォーマンス等、既存のジャンルを越境する意欲的な作品の応募をお待ちしています。

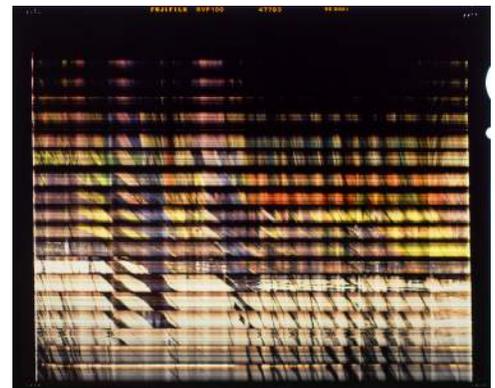
平成26年度[第18回]文化庁メディア芸術祭
アート部門 優秀賞受賞作品

『これは映画ではないらしい』

メディアインスタレーション

五島 一浩 [日本]

従来の映画や動画を成立させる「コマ(静止画)」の連続とは異なり、「コマの無い動画カメラ/映写機」によって「動く画像」を生み出す作品。本作ではこれまでの映画/動画の基本概念を問い直す、かつてない画期的なシステムが考案・実証されている。



© 2014 Kazuhiro GOSHIMA All Rights Reserved.

※歴代の受賞作品は、アーカイブサイト (<http://archive.j-mediaarts.jp>) でご確認ください。

※文化庁メディア芸術祭での受賞は、国内外のフェスティバルへの出展や創作活動の支援など、関連事業を通じた新たな活動にもつながります。

広報問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局 広報担当[hilo Press内] 鎌倉・土井・伊藤

Email: jmaf19-pr@hilopress.net Tel: 03-5577-4792 Fax: 03-6369-3596 ※受付時間: 平日10時~18時

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-18-11-905

審査委員から届いたメッセージ



佐藤 守弘(視覚文化研究者/京都精華大学教授)

19世紀に登場したメディア技術は、21世紀に生きる私たちの周囲に遍在し、私たちの知覚を拡張しています。それらはもはやなんら特別なものではなく、まさに私たちの生きる「環境」そのものであるかのようです。そのように環境に身を潜めているメディア技術を可視化し異化するのが、アートの役割のひとつなのかもしれません。

今年度のメディア芸術祭アート部門でも、人間とメディア技術を、たんに「使う/使われる」という一方向の関係に固定せずに、それらが相互にはたらきあっている界面を問うような作品が多く見られることを期待しています。

■審査委員プロフィール

石田 尚志(画家/映像作家/多摩美術大学准教授)

1972年、東京都生まれ。多摩美術大学准教授。90年より本格的な絵画制作、92年頃より映像制作を始める。絵画制作のプロセスである「絵を描く」という行為そのものに着目し、それを映像メディアによって「動く絵」として作品に昇華させる、画家/映像作家。近年の主な展覧会に「石田尚志 渦まく光 Billowing Light : ISHIDA Takashi」(横浜美術館、沖縄県立博物館・美術館、2015年)、「Distilling Senses: A Journey through Art and Technology in Asian Contemporary Art」(香港アートセンター、13年)、「ダブル・ヴィジョンー日本現代美術展」(モスクワ市近代美術館ほか、12年)、「MOTコレクション 特集展示 石田尚志」(東京都現代美術館、11年)など。五島記念文化賞美術新人賞受賞(07年)。

植松 由佳(国立国際美術館主任研究員)

香川県生まれ。1993年より丸亀市猪熊弦一郎現代美術館勤務を経て現職。現代美術を中心に国内外で展覧会を企画。主なものに映像作品によるグループ展「夢か、現か、幻か」やヴォルフガング・ティルマンス、やなぎみわ、ピピロッチェ・リスト、エイヤ＝リーサ・アハティラ、マルレーネ・デュマス、マリーナ・アブラモヴィッチ、草間彌生、ヤン・ファープルの個展など多数企画。第54回ベネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー(作家：東芋)、第13回バンガラデシュ・ビエンナーレ日本参加コミッショナーを務めた。

佐藤 守弘(視覚文化研究者/京都精華大学教授)

1966年、京都府生まれ。コロンビア大学大学院修士課程修了。同志社大学大学院博士後期課程退学。博士(芸術学)。芸術学・視覚文化論専攻。著書に『トポグラフィの日本近代ー江戸泥絵・横浜写真・芸術写真』(青弓社、2011年)など。最近の論文に「ノスタルジアとのつきあい方」(『記憶の遠近術～篠山紀信、横尾忠則を撮る』芸術新聞社、14年)「産業資本主義の画像＝言語ー写真アーカイヴとセクラー」(『PARASOPHIA 京都国際現代芸術祭2015[公式カタログ]』、15年)など。翻訳にジェフリー・バッチェン『写真のアルケオロジー』(共訳、青弓社、10年)など。第62回芸術選奨文部科学大臣新人賞(評論等部門)受賞。

中ザワ ヒデキ(美術家)

1963年、新潟県生まれ。千葉大学医学部在学中の83年よりアーティスト活動を開始(第一期：アクリル画)。卒業後眼科医となるも90年、絵筆をコンピューターのマウスに持ち替えイラストレーターに転身(第二期：パカCG)。97年、CGの画素を文字等の記号に置き換え純粋美術家に転身(第三期：方法絵画)。2006年、方法主義では禁じていた色彩を再び使用し、以後多彩に活動(第四期：本格絵画、新・方法、第四表現主義、他)。宣言「方法主義宣言」「新・方法主義宣言」。特許「三次元グラフィックス編集装置」「造形装置および方法」。著書『近代美術史テキスト』『西洋画人列伝』『現代美術史日本篇1945-2014』。CD『中ザワヒデキ音楽作品集』。代表作《文字座標型絵画》《単一曲線》《盤上布石絵画》《質量》《金額》《芸術特許》《灰色絵画》《脳波ドロ잉》《アンチアンチエイリアシング》。

藤本 由紀夫(アーティスト)

1950年、愛知県生まれ。大阪芸術大学音楽学科卒。主な個展に97年から2006年まで10年間毎年1日のみ開催された展覧会「美術館の遠足」西宮市大谷記念美術館(兵庫)、01年「四次元の読書」CCGA現代グラフィックアートセンター(福島)、06年「ここ、そして、そこ」名古屋市美術館(名古屋)、07年「ECHO - 潜在的音響」広島市現代美術館(広島)、「哲学的玩具」西宮市大谷記念美術館(兵庫)、「+/-」国立国際美術館(大阪)、「関係」和歌山県立近代美術館(和歌山)など。主なグループ展に01年「第49回ヴェニス・ビエンナーレ」、07年「第52回ヴェニス・ビエンナーレ」(ヴェニス)など。80年代半ばより日常のなかの「音」に着目した装置、サウンド・オブジェを制作。インスタレーションやパフォーマンス、ワークショップを通じて、空間における「音」の体験から新たな認識へと開かれていくような活動を展開している。

■アート部門 募集概要

デジタル技術を用いて作られたアート作品

[インタラクティブアート、メディアインスタレーション、映像作品、映像インスタレーション、グラフィックアート(デジタル写真を含む)、ネットアート、メディアパフォーマンス等]

募集期間 2015年7月7日(火)～9月9日(水) 日本時間 18:00 必着

応募条件 ※応募する作品が下記に該当するかを必ず確認の上でご応募ください。

- 2014年9月3日(水)から2015年9月9日(水)までの間に完成した作品、
または、すでに完成してこの期間内に公開された作品。

※更新、リニューアルされた作品で上記期間中に完成、または発表された作品も応募可能です。

※応募する作品数に制限はありませんが、同一の作品を複数の部門に重複して応募することはできません。

- 応募者は作品の著作権を有することが必要です。

代理の方が応募する場合は、必ず著作権者に承諾を得てください。

※応募申込をもって、応募者および作者の同意を得られたものとします。

※募集要項・公式ウェブサイトに記載された応募規定特記を必ずお読みいただき、同意の上でご応募ください。

各 賞

高い芸術性と創造性を基準として、部門ごとに大賞、優秀賞、新人賞を選定します。

また、審査委員会の推薦により、メディア芸術分野に貢献のあった方に対して、功労賞を贈呈します。

メディア芸術祭賞(文部科学大臣賞)

大 賞：賞状、トロフィー、副賞60万円 優 秀 賞：賞状、トロフィー、副賞30万円

新 人 賞：賞状、トロフィー、副賞20万円 功 労 賞：賞状、トロフィー

このほか、優れた作品を審査委員会推薦作品として選定します。

平成27年度[第19回]文化庁メディア芸術祭 開催概要

文化庁メディア芸術祭は、アート、エンターテインメント、アニメーション、マンガの4部門において優れた作品を顕彰するとともに、受賞作品の鑑賞機会を提供するメディア芸術の総合フェスティバルです。昨年度[第18回]は、世界71の国と地域から3,853点に及ぶ作品の応募があり、なかでも国内からの応募数は2,035点と過去最多となりました。文化庁メディア芸術祭は多様化する現代の表現を見据える国際的なフェスティバルへと成長を続けています。

作品募集	2015年7月7日(火)～9月9日(水) 日本時間 18:00 必着
受賞発表	2015年11月下旬
贈呈式	2016年2月2日(火) 会場：国立新美術館(東京・六本木)
受賞作品展	2016年2月3日(水)～2月14日(日) 会場：国立新美術館(東京・六本木) 他 ※国立新美術館は2月9日(火)休館 他会場については決まり次第、フェスティバルサイト等でお知らせします。



昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子



文化庁メディア芸術祭
公式ウェブサイト

<http://j-mediaarts.jp>

フェスティバルサイト

<http://festival.j-mediaarts.jp>

Facebook

<http://www.facebook.com/JapanMediaArtsFestival>

Twitter

@JMediaArtsFes

主催

文化庁メディア芸術祭実行委員会

問合せ先

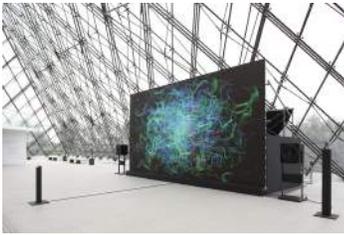
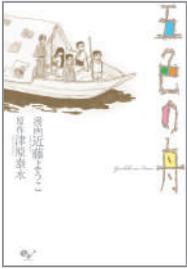
文化庁メディア芸術祭事務局[CG-ARTS協会内]

E-mail：jmaf@cgarts.or.jp

Tel：03-3535-3501 ※受付時間：平日10時～18時

平成27年度[第19回]文化庁メディア芸術祭
広報用素材貸出申請書

「第19回文化庁メディア芸術祭」広報用として、下記のデータをご用意しております。貸出をご希望の方は、こちらの申請書に必要事項と希望素材のアルファベットを○で囲み、文化庁メディア芸術祭事務局広報担当[hilo Press内]までお送り下さい。

<p>[A] ロゴ式(zip) ※使用規定(pdf)同封</p> 		<p>[B] ポスター・チラシ画像(zip)</p> 	
<p>[C] 広報画像(zip)・・・昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品画像[1] - [4].jpg 昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子[5] - [8].jpg ※使用規定(pdf)同封</p>			
<p>[1] アート部門優秀賞</p>  <p>[1] <クレジット> Photo : Keizo Kioku, Courtesy of Creative City Sapporo International Art Festival Executive Committee <キャプション> 第18回文化庁メディア芸術祭 アート部門優秀賞 『センシング・ストリームズー 不可視、不可聴』 坂本 龍一 / 真鍋 大度</p>	<p>[2] エンターテインメント部門大賞</p>  <p>[2] <クレジット> Photo : Google's Niantic Labs <キャプション> 第18回文化庁メディア芸術祭 エンターテインメント部門大賞 『Ingress』 Google's Niantic Labs (創業者 : John HANKE)</p>	<p>[3] アニメーション部門大賞</p>  <p>[3] <クレジット> ©Ural-Cinema <キャプション> 第18回文化庁メディア芸術祭 アニメーション部門大賞 『The Wound』 Anna BUDANOVA</p>	<p>[4] マンガ部門大賞</p>  <p>[4] <クレジット> 近藤ようこ・津原泰水/ KADOKAWA刊 <キャプション> 第18回文化庁メディア 芸術祭マンガ部門大賞 『五色の舟』 近藤 ようこ/原作 : 津原 泰水</p>
<p>[5]</p> 	<p>[6]</p> 	<p>[7]</p> 	<p>[8]</p> 
<p><キャプション/[5] - [8]共通> 昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子 提供 : 文化庁メディア芸術祭事務局</p>			

<広報画像のご使用にあたって>
※広報画像のご使用は「第19回文化庁メディア芸術祭」をご紹介いただく場合に限りさせていただきます。フェスティバル終了後は使用できません。
※広報画像[1] - [8]は全国でご使用ください。部分使用や作品に文字や他のイメージを重ねることはお控えください。
※指定クレジットを必ずご記載いただきますようお願いいたします。またキャプションを可能な限りご記載いただきますようお願いいたします。
※校正ゲラを広報担当までお送りください。

貴社についてお知らせください

○貴社名	○媒体名
○ご担当者名	○所属部署
○ご住所 〒	○Email
○Tel	○Fax
○ご掲載・放映の予定日	月 日

<個人情報の取り扱いについて>
ご記入いただきました個人情報は、文化庁メディア芸術祭広報からの情報配信やご案内など必要なご連絡のみ使用いたします。許可なく第三者に個人情報を開示することはいたしません。

広報問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局 広報担当 [hilo Press 内] 鎌倉・土井・伊藤
Email : jmaf19-pr@hilopress.net Tel : 03-5577-4792 Fax : 03-6369-3596 ※受付時間 : 平日10時~18時
〒101-0047 東京都千代田区内神田 1-18-11-905 5/5

平成27年度[第19回] 文化庁メディア芸術祭 エンターテインメント部門 9/9(水)まで作品募集中 審査委員から届いたメッセージをご紹介します。

<http://j-mediaarts.jp>

文化庁メディア芸術祭では、9月9日(水)18:00まで作品を募集しています。

エンターテインメント部門には、遊びや体験をつくりだす多種多様な形式の作品が集います。審査委員には、ゲーム作家の飯田和敏氏、現在美術家でDOMMUNE主宰の宇川直宏氏、デザイナー／クリエイティブディレクターの東泉一郎氏、ゲームデザイナーの米光一成氏のほか、今年度から青森県立美術館学芸員の工藤健志氏が新たに加わりました。ゲーム作品、ミュージックビデオや自主制作・広告映像、空間表現、ガジェット、ウェブプロモーション、オープンソースプロジェクト、アプリケーション等、創意あふれる作品の応募をお待ちしています。

平成26年度[第18回]文化庁メディア芸術祭
エンターテインメント部門 優秀賞受賞作品

『handiii』

ガジェット

近藤 玄大／山浦 博志／小西 哲哉 [日本]

3Dプリンターで出力したパーツと、スマートフォンを制御に利用した「気軽な選択肢」をコンセプトとした筋電義手。デザイン面、機能面の拡張を加えることで、あらゆる人々が羨ましいと思う義手を目指し開発を進めている。



© 2014 exiii Inc.

※歴代の受賞作品は、アーカイブサイト (<http://archive.j-mediaarts.jp>) でご確認ください。

※文化庁メディア芸術祭での受賞は、国内外のフェスティバルへの出展や創作活動の支援など、関連事業を通じた新たな活動にもつながります。

広報問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局 広報担当[hilo Press内] 鎌倉・土井・伊藤

Email : jmaf19-pr@hilopress.net Tel : 03-5577-4792 Fax : 03-6369-3596 ※受付時間：平日10時～18時

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-18-11-905

審査委員から届いたメッセージ



飯田 和敏(ゲーム作家/立命館大学映像学部教授)

プロアマチュア、商業非商業不問のメディア芸術祭。とりわけエンターテインメント部門は自由度が高く、これまでにロボットとゲーム、コミュニティプロジェクトと広告映像が並んだ。事実上、ジャンルも不問となっている。いきおいで、メディアすら不問か!? 最低限のレギュレーションをチェックして2015年の出来事を教えてほしい。〆切は9/9(過去最高に覚えやすい!)



工藤 健志(青森県立美術館学芸員)

そもそも「エンターテインメント」という概念は曖昧である。娯楽? 遊び? 嗜好に寄与するもの? しかし、広く一般に支持されるものとそれとは決して同義ではないだろう。僕はそれを人間の感情や感覚に深く作用し、新しい「意識」を覚醒させてくれるものとして捉えたい。現代という時代の「美意識」を研ぎ澄まし、人間の「審美眼」を刷新してくれるような作品に出会えることを期待している。



東泉 一郎(デザイナー/クリエイティブディレクター)

華美やギミックに頼らずひっそりと本質が人の心に響くもの。

新しすぎて居場所を見つけられていないもの。

未だ言語化されていない兆しのようなもの。

それらを発見し、光を当て、存在証明の手助けをできればと思います。

そういうものたちに引っぱられて、世界観や常識や感性は、変わっていくのですから。

■審査委員プロフィール

飯田 和敏(ゲーム作家/立命館大学映像学部教授)

1968年、東京都生まれ。95年、『アクアノートの休日』(PlayStation)でディレクターデビュー。以降、『太陽のしっぽ』(PlayStation)、『巨人のドシン』(Nintendo64DD)、『ディズプリン*帝国の誕生』(WiiWare)、『エヴァンゲリオン 新劇場版—サウンドインパクト—』(PSP)、『LINE イージーダイバー』(LINE GAME)などを発表。既存のビデオゲームの概念にとらわれない斬新な作風で知られる。2011年には平成23年度[第15回]文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門優秀賞受賞作品である日本科学未来館の常設展示『アナグラのうた—消えた博士と残された装置』の演出を担当。他に書籍、雑誌などの媒体における執筆活動も行っている。

宇川 直宏(現在美術家/京都造形芸術大学教授/DOMMUNE 主宰)

1968年生まれ。映像作家、グラフィックデザイナー、ミュージック・ビデオディレクター、VJ、文筆家、京都造形大学教授、“現在美術家”など、多岐にわたる活動を行う全方位的アーティスト。2010年3月に個人で開局したライブストリーミング・チャンネル「DOMMUNE」は、開局と同時に記録的なビューアー数となり、国内外で話題を呼ぶ。「DOMMUNE」は平成22年度[第14回]文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品に選出。

工藤 健志(青森県立美術館学芸員)

1967年生まれ。青森県立美術館には準備室時代から在籍。専門は戦後日本美術。「美術」の枠組みや「展覧会」の制度を問い直す企画を多数手がけている。主な担当展に、「立石大河 1963-1993」(94年)、「山本作兵衛展」(96年)、「縄文と現代」(2007年)、「寺山修司◎劇場美術館」(08年)、「ラブラブショー」(09年)、「Art and Air」(12年)、「成田亨 美術/特撮/怪獣」(15年)など。「造形集団 海洋堂の軌跡」(04年～、水戸美術館、台北市立美術館他)、「ボックスアート」(06年～、静岡県立美術館他)といった巡回展のキュレーションも担当。近年は静岡県立美術館・村上敬氏、島根県立石見美術館・川西由里氏と3名で視覚文化研究を行う「トリメガ研究所」を結成し、「ロボットと美術」(10年)、「美少女の美術史」(14年)の2本の展覧会を開催した。著書に『青森県立美術館コンセプトブック』(スペースシャワーボックス、14年)など。

東泉 一郎(デザイナー/クリエイティブディレクター)

東京に生まれ、理工学を学んだのち、デザイナーに。「はじめてつくるものをつくる」ために働く。速いもの高いところ好き。さまざまなデザイン領域と、サイエンス、エンジニアリング、アート、身体的表現などの間を翻訳・橋渡ししつつ、総合的なものごとの解決とイノベーションに取り組む。1997年アルスエレクトロニカネットワーク部門ゴールド・ニカを受賞した『Sensorium project』のディレクターとして、海外各地で実験的インスタレーションを行う他、日本科学未来館『インターネット物理モデル』、2002 FIFA World Cupのための演出コンセプトワーク、KDDI「AU design project」コンセプトモデル、JAXA「moonbell」、エモーショナル・フィジカルインターフェースの開発など、ストリート・音楽・ダンスなどに根差した表現から、トータルなコンセプトデザインまで、大小を問わずコミュニケーションをデザインしている。

米光 一成(ゲームデザイナー)

1964年生まれ。ゲーム作家、ライター。『ぶよぶよ』『想像と言葉』『BAROQUE』『King of Wands』など多数のゲーム企画・脚本・監督を手掛ける。新作ゲームは『想像と言葉』。著書に『思考ツールとしてのタロット(Kindle版)』『自分だけにしか思いつかないアイデアを見つける方法』(日本経済新聞出版社)、『仕事を100倍楽しくするプロジェクト攻略本』(KKベストセラーズ)など。公開句会「東京マッハ」メンバー。句集「舌多くして」(電書カプセル)。宣伝会議「編集ライター講座上級クラス」の専任講師、池袋コミュニティ・カレッジ「表現道場」講師を務める。

■エンターテインメント部門 募集概要

デジタル技術を用いて作られたエンターテインメント作品

[ゲーム(テレビゲーム、オンラインゲーム等)、映像・音響作品(ミュージックビデオ、自主制作・広告映像等)、空間表現(特殊映像効果・演出、パフォーマンスを含む)、ガジェット(プロダクト、ツールを含む)、ウェブ(ウェブプロモーション、オープンソースプロジェクトを含む)、アプリケーション等]

募集期間 2015年7月7日(火)～9月9日(水)日本時間 18:00 必着

応募条件 ※応募する作品が下記に該当するかを必ず確認の上でご応募ください。

- 2014年9月3日(水)から2015年9月9日(水)までの間に完成した作品、
または、すでに完成してこの期間内に公開された作品。

※更新、リニューアルされた作品で上記期間中に完成、または発表された作品も応募可能です。

※応募する作品数に制限はありませんが、同一の作品を複数の部門に重複して応募することはできません。

- 応募者は作品の著作権を有することが必要です。

代理の方が応募する場合は、必ず著作権者に承諾を得てください。

※応募申込をもって、応募者および作者の同意を得られたものとします。

※募集要項・公式ウェブサイトに記載された応募規定特記を必ずお読みいただき、同意の上でご応募ください。

各 賞

高い芸術性と創造性を基準として、部門ごとに大賞、優秀賞、新人賞を選定します。

また、審査委員会の推薦により、メディア芸術分野に貢献のあった方に対して、功労賞を贈呈します。

メディア芸術祭賞(文部科学大臣賞)

大 賞：賞状、トロフィー、副賞60万円 優 秀 賞：賞状、トロフィー、副賞30万円

新 人 賞：賞状、トロフィー、副賞20万円 功 労 賞：賞状、トロフィー

このほか、優れた作品を審査委員会推薦作品として選定します。

平成27年度[第19回]文化庁メディア芸術祭 開催概要

文化庁メディア芸術祭は、アート、エンターテインメント、アニメーション、マンガの4部門において優れた作品を顕彰するとともに、受賞作品の鑑賞機会を提供するメディア芸術の総合フェスティバルです。昨年度[第18回]は、世界71の国と地域から3,853点に及ぶ作品の応募があり、なかでも国内からの応募数は2,035点と過去最多となりました。文化庁メディア芸術祭は多様化する現代の表現を見据える国際的なフェスティバルへと成長を続けています。

作品募集	2015年7月7日(火)～9月9日(水) 日本時間 18:00 必着
受賞発表	2015年11月下旬
贈呈式	2016年2月2日(火) 会場：国立新美術館(東京・六本木)
受賞作品展	2016年2月3日(水)～2月14日(日) 会場：国立新美術館(東京・六本木) 他 ※国立新美術館は2月9日(火)休館 他会場については決まり次第、フェスティバルサイト等でお知らせします。



昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子



文化庁メディア芸術祭
公式ウェブサイト

<http://j-mediaarts.jp>

フェスティバルサイト

<http://festival.j-mediaarts.jp>

Facebook

<http://www.facebook.com/JapanMediaArtsFestival>

Twitter

@JMediaArtsFes

主催

文化庁メディア芸術祭実行委員会

問合せ先

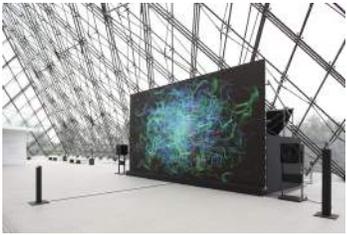
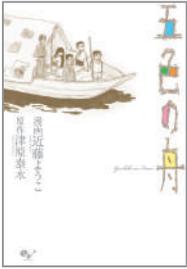
文化庁メディア芸術祭事務局[CG-ARTS協会内]

E-mail：jmaf@cgarts.or.jp

Tel：03-3535-3501 ※受付時間：平日10時～18時

平成27年度[第19回]文化庁メディア芸術祭
 広報用素材貸出申請書

「第19回文化庁メディア芸術祭」広報用として、下記のデータをご用意しております。貸出をご希望の方は、こちらの申請書に必要事項と希望素材のアルファベットを○で囲み、文化庁メディア芸術祭事務局広報担当[hilo Press内]までお送り下さい。

<p>[A] ロゴ式(zip) ※使用規定(pdf)同封</p> 		<p>[B] ポスター・チラシ画像(zip)</p> 	
<p>[C] 広報画像(zip)・・・昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品画像[1] - [4].jpg 昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子[5] - [8].jpg ※使用規定(pdf)同封</p>			
<p>[1] アート部門優秀賞</p>  <p>[1] <クレジット> Photo : Keizo Kioku, Courtesy of Creative City Sapporo International Art Festival Executive Committee <キャプション> 第18回文化庁メディア芸術祭 アート部門優秀賞 『センシング・ストリームズー 不可視、不可聴』 坂本 龍一 / 真鍋 大度</p>	<p>[2] エンターテインメント部門大賞</p>  <p>[2] <クレジット> Photo : Google's Niantic Labs <キャプション> 第18回文化庁メディア芸術祭 エンターテインメント部門大賞 『Ingress』 Google's Niantic Labs (創業者 : John HANKE)</p>	<p>[3] アニメーション部門大賞</p>  <p>[3] <クレジット> ©Ural-Cinema <キャプション> 第18回文化庁メディア芸術祭 アニメーション部門大賞 『The Wound』 Anna BUDANOVA</p>	<p>[4] マンガ部門大賞</p>  <p>[4] <クレジット> 近藤ようこ・津原泰水/ KADOKAWA刊 <キャプション> 第18回文化庁メディア 芸術祭マンガ部門大賞 『五色の舟』 近藤 ようこ/原作 : 津原 泰水</p>
<p>[5]</p> 	<p>[6]</p> 	<p>[7]</p> 	<p>[8]</p> 
<p><キャプション/[5] - [8]共通> 昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子 提供 : 文化庁メディア芸術祭事務局</p>			

<広報画像のご使用にあたって>

※広報画像のご使用は「第19回文化庁メディア芸術祭」をご紹介いただく場合に限りさせていただきます。フェスティバル終了後は使用できません。
 ※広報画像[1] - [8]は全国でご使用ください。部分使用や作品に文字や他のイメージを重ねることはお控えください。
 ※指定クレジットを必ずご記載いただきますようお願いいたします。またキャプションを可能な限りご記載いただきますようお願いいたします。
 ※校正ゲラを広報担当までお送りください。

貴社についてお知らせください

○貴社名 _____

○ご担当者名 _____ 様

○ご住所 〒 _____

○Tel _____

○ご掲載・放映の予定日 _____ 月 _____ 日

○媒体名 _____

○所属部署 _____

○Email _____

○Fax _____

<個人情報の取り扱いについて>

ご記入いただきました個人情報は、文化庁メディア芸術祭広報からの情報配信やご案内など必要なご連絡のみ使用いたします。許可なく第三者に個人情報を開示することはいたしません。

広報問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局 広報担当 [hilo Press 内] 鎌倉・土井・伊藤

Email : jmaf19-pr@hilopress.net Tel : 03-5577-4792 Fax : 03-6369-3596 ※受付時間 : 平日10時~18時
 〒101-0047 東京都千代田区内神田 1-18-11-905

平成27年度[第19回] 文化庁メディア芸術祭 アニメーション部門 9/9(水)まで作品募集中 審査委員から届いたメッセージをご紹介します。

<http://j-mediaarts.jp>

文化庁メディア芸術祭では、9月9日(水)18:00まで作品を募集しています。

アニメーション部門には、圧倒的な物語や個性的な表現力をもった、完成度とオリジナリティを極めた作品が集います。審査委員には、アニメーション作家の大井文雄氏、アニメーション研究者の小出正志氏、アニメーション監督の高橋良輔氏、アニメーション監督の森本晃司氏のほか、今年度から『頭山』や『カフカ 田舎医者』などをはじめ、多数の受賞歴を誇るアニメーション作家の山村浩二氏が新たに加わりました。劇場アニメーション、短編アニメーション、テレビアニメーション、オリジナルビデオアニメーション(OVA)等、手描きによる作画からフル3DCG、それらを融合させたアニメーションなど、幅広い作品の応募をお待ちしています。

平成26年度[第18回]文化庁メディア芸術祭
アニメーション部門 大賞受賞作品

『The Wound』

短編アニメーション

Anna BUDANOVA [ロシア]

心の傷(英・wound ウウンド)に苦しむ少女。その傷が少女の空想の中で、毛むくじゃらの生き物・ウウンドとして誕生する。少女とともに成長していくウウンドは、だんだんと存在感を増し、やがてその人生を完全にコントロールするようになる…



©Ural-Cinema

※歴代の受賞作品は、アーカイブサイト (<http://archive.j-mediaarts.jp>) でご確認ください。

※文化庁メディア芸術祭での受賞は、国内外のフェスティバルへの出展や創作活動の支援など、関連事業を通じた新たな活動にもつながります。

広報問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局 広報担当[hilo Press内] 鎌倉・土井・伊藤

Email : jmaf19-pr@hilopress.net Tel : 03-5577-4792 Fax : 03-6369-3596 ※受付時間：平日10時～18時

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-18-11-905

審査委員から届いたメッセージ



小出 正志(アニメーション研究者/東京造形大学教授)

今年もまた文化庁メディア芸術祭の作品募集が始まった。既に20年近くの歴史を持ち特色あるフェスティバルに成長している。応募数も多いが、より多くの多彩な作品が集まることを期待したい。アニメーション部門はジャンルやカテゴリーを分けていない。更に他部門もある。分かりにくさの指摘もあるが、一方でそれが多種多様、独創的で斬新な形式や方法・様式による、新しい時代を切り開くような作品の応募を保証し可能にしている。



高橋 良輔(アニメーション監督)

芸術祭に参加しようというくらい作品には、ときに意欲余って、一人相撲の空回りということもありませんが、先進的創造に混沌は付きものです。活力ある混沌にこそ時代を切り開いていく何物かが潜んでいると信じます。世界を刮目させる斬新な作品を待っております。



山村 浩二(アニメーション作家/東京藝術大学大学院教授)

審査委員にできるのは、出来るだけ丁寧に作品を見て、その作品の本質を見極める目利きの役目だと思います。いま存在している作品群の潮流を把握し「現在の全体」を感じられるセレクションができればと思っています。枠にはまらない、アニメーションの定義を揺るがすような作品の多様性を期待しています。

■審査委員プロフィール

大井 文雄(アニメーション作家)

1944年、京都府生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業。大学時代からアニメーション創作活動始める。当時の草月アニメーションフェスティバルや実験映画祭で受賞歴がある。81年株式会社スリー・ディ設立に参加。テレビ番組オープニングタイトル、NHK『みんなのうた』のアニメーションを多数制作。他TVCM制作に数多く携わる。2000年以降フリーランスで創作活動。アニメーション制作集団「G9+1」同人。日本アニメーション協会監事。

小出 正志(アニメーション研究者/東京造形大学教授)

1957年、愛知県生まれ。東京造形大学造形学部デザイン学科卒業(映像専攻)。88年、東京造形大学着任。専門はコミュニケーションデザイン、映像学、アニメーション研究。コミュニケーションデザインの教育と研究に携わるほか、アニメーションの教育と理論的研究、研究会やセミナー、ワークショップ、展覧会や映画祭などの企画・運営などに従事。日本アニメーション学会会長、新千歳空港国際アニメーション映画祭実行委員長、日本アニメーション協会理事、インターカレッジアニメーションフェスティバル(ICAF)実行委員。日本映像学会、国際アニメーションフィルム協会(ASIFA)他会員。最近の共編著作に『映画百科大事典』(日本図書センター、2008年)、『アニメーションの事典』(朝倉書店、12年)、『現代デザイン事典』(平凡社、14年)など。

高橋 良輔(アニメーション監督)

1943年、東京都生まれ。64年、株式会社虫プロダクションに入社、テレビアニメーション創世期に演出として各種作品にあたる。虫プロダクションを退社後、株式会社サンライズ創業期にSF作品『ゼロテスター』を監督しその後の同社の方向を決める。代表作として『太陽の牙ダグラム』(原作・監督/81年)、『装甲騎兵ボトムズ』(原作・監督/83年)がある。他に手塚プロダクション『火の鳥』(監督/2004年)、NHK『モリゾーとキッコロ』(監督/04年)、アニメプレックス『FLAG』(原作・総監督/06年)、サンライズ『幕末機関説いろはにほへと』(原作・総監督/06年)、WOWOW開局20年記念番組『オズマ』(総監督/12年)などがある。近年は大阪芸術大学にて教授として後進の指導にもあたっている。

森本 晃司(アニメーション監督)

1959年、和歌山県生まれ。『AKIRA』の作画監督補佐などを経て、監督代表作に『MEMORIES「彼女の想いで」』『EXTRA』『アニマトリックス』『次元爆弾』『SHORTPEACE』のオープニングなど。『次元爆弾』は2011年にパリ・カルティエ現代美術館で開催された「メビウス-トランスフォーム展」にて特別上映、「Little Tokyo Design week」(ロサンゼルス)でも展示上映された。11年にフランスのインタラクティブWEB広告『Attraction / 魅力』でカンヌ・インターナショナル・クリエイティビティ・フェスティバルにてサイバー部門銀賞を受賞。13年LEXUS社とハリウッドのワインスタイン・カンパニー社によって製作された『LEXUS SHORT FILMS』の作品「A Better Tomorrow」のアニメーションパートに監督として参加。第66回カンヌ国際映画祭にてワールドプレミアでリリースされた。同年初の舞台演出として『羊人間012』の脚本/演出を務める。2014年、世界的に活躍する、インストゥルメンタル・ポストロックバンド『MONO』の新譜の15秒ティーザーを監督した。

山村 浩二(アニメーション作家/東京藝術大学大学院教授)

1964年、愛知県生まれ。87年東京造形大学卒業。90年代『カロとピヨブプト』『パクシ』など子ども向け作品を多彩な技法で制作。2002年『頭山』が、アヌシー・広島・ザグレブの各国際アニメーション映画祭で最高賞に輝き、アカデミー賞®最優秀短編アニメーション賞にノミネート、その後『年をとった鱈』(05年)、『カフカ 田舎医者』(07年)で、その名声を揺ぎないものとした。『マイブリッジの糸』(11年)は、カナダ国立映画制作庁との日本初の共同製作。12年、これまでの国際的な業績とアニメーションへの徹底した献身が高く評価され、第30回川喜多賞を受賞。『おやおや、おやさ』(福音館書店)など、絵本画家、イラストレーターとしても活躍。13年よりアニメーションストア & ギャラリー Au Praxinoscopeを開設。ヤマムラアニメーション代表、ASIFA日本支部理事、日本アニメーション協会副会長、比治山大学客員教授、東京造形大学客員教授、東京藝術大学教授。

■アニメーション部門 募集概要

アニメーション作品

[劇場アニメーション、短編アニメーション、テレビアニメーション、オリジナルビデオアニメーション(OVA)等]

募集期間 2015年7月7日(火)～9月9日(水)日本時間 18:00 必着

応募条件 ※応募する作品が下記に該当するかを必ず確認の上でご応募ください。

2014年9月3日(水)から2015年9月9日(水)までの間に完成した作品、

または、すでに完成してこの期間内に公開された作品。

※更新、リニューアルされた作品で上記期間中に完成、または発表された作品も応募可能です。

※応募する作品数に制限はありませんが、同一の作品を複数の部門に重複して応募することはできません。

応募者は作品の著作権を有することが必要です。

代理の方が応募する場合は、必ず著作権者に承諾を得てください。

※応募申込をもって、応募者および作者の同意を得られたものとします。

※募集要項・公式ウェブサイトに記載された応募規定特記を必ずお読みいただき、同意の上でご応募ください。

各 賞 高い芸術性と創造性を基準として、部門ごとに大賞、優秀賞、新人賞を選定します。

また、審査委員会の推薦により、メディア芸術分野に貢献のあった方に対して、功労賞を贈呈します。

メディア芸術祭賞(文部科学大臣賞)

大 賞：賞状、トロフィー、副賞60万円

優 秀 賞：賞状、トロフィー、副賞30万円

新 人 賞：賞状、トロフィー、副賞20万円

功 労 賞：賞状、トロフィー

このほか、優れた作品を審査委員会推薦作品として選定します。

平成27年度[第19回]文化庁メディア芸術祭 開催概要

文化庁メディア芸術祭は、アート、エンターテインメント、アニメーション、マンガの4部門において優れた作品を顕彰するとともに、受賞作品の鑑賞機会を提供するメディア芸術の総合フェスティバルです。昨年度[第18回]は、世界71の国と地域から3,853点に及ぶ作品の応募があり、なかでも国内からの応募数は2,035点と過去最多となりました。文化庁メディア芸術祭は多様化する現代の表現を見据える国際的なフェスティバルへと成長を続けています。

作品募集	2015年7月7日(火)～9月9日(水) 日本時間 18:00 必着
受賞発表	2015年11月下旬
贈呈式	2016年2月2日(火) 会場：国立新美術館(東京・六本木)
受賞作品展	2016年2月3日(水)～2月14日(日) 会場：国立新美術館(東京・六本木) 他 ※国立新美術館は2月9日(火)休館 他会場については決まり次第、フェスティバルサイト等でお知らせします。



昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子



文化庁メディア芸術祭
公式ウェブサイト

<http://j-mediaarts.jp>

フェスティバルサイト

<http://festival.j-mediaarts.jp>

Facebook

<http://www.facebook.com/JapanMediaArtsFestival>

Twitter

@JMediaArtsFes

主催

文化庁メディア芸術祭実行委員会

問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局[CG-ARTS協会内]

E-mail：jmaf@cgarts.or.jp

Tel：03-3535-3501 ※受付時間：平日10時～18時

平成27年度[第19回]文化庁メディア芸術祭
 広報用素材貸出申請書

「第19回文化庁メディア芸術祭」広報用として、下記のデータをご用意しております。貸出をご希望の方は、こちらの申請書に必要事項と希望素材のアルファベットを○で囲み、文化庁メディア芸術祭事務局広報担当[hilo Press内]までお送り下さい。

<p>[A] ロゴ式(zip) ※使用規定(pdf)同封</p> 		<p>[B] ポスター・チラシ画像(zip)</p> 	
<p>[C] 広報画像(zip)・・・昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品画像[1] - [4].jpg 昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子[5] - [8].jpg ※使用規定(pdf)同封</p>			
<p>[1] アート部門優秀賞</p>  <p>[1] <クレジット> Photo : Keizo Kioku, Courtesy of Creative City Sapporo International Art Festival Executive Committee <キャプション> 第18回文化庁メディア芸術祭 アート部門優秀賞 『センシング・ストリームズー 不可視、不可聴』 坂本 龍一 / 真鍋 大度</p>	<p>[2] エンターテインメント部門大賞</p>  <p>[2] <クレジット> Photo : Google's Niantic Labs <キャプション> 第18回文化庁メディア芸術祭 エンターテインメント部門大賞 『Ingress』 Google's Niantic Labs (創業者 : John HANKE)</p>	<p>[3] アニメーション部門大賞</p>  <p>[3] <クレジット> ©Ural-Cinema <キャプション> 第18回文化庁メディア芸術祭 アニメーション部門大賞 『The Wound』 Anna BUDANOVA</p>	<p>[4] マンガ部門大賞</p>  <p>[4] <クレジット> 近藤ようこ・津原泰水/ KADOKAWA刊 <キャプション> 第18回文化庁メディア 芸術祭マンガ部門大賞 『五色の舟』 近藤 ようこ/原作 : 津原 泰水</p>
<p>[5]</p> 	<p>[6]</p> 	<p>[7]</p> 	<p>[8]</p> 
<p><キャプション/[5] - [8]共通> 昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子 提供 : 文化庁メディア芸術祭事務局</p>			

<広報画像のご使用にあたって>

※広報画像のご使用は「第19回文化庁メディア芸術祭」をご紹介いただく場合に限りさせていただきます。フェスティバル終了後は使用できません。
 ※広報画像[1] - [8]は全国でご使用ください。部分使用や作品に文字や他のイメージを重ねることはお控えください。
 ※指定クレジットを必ずご記載いただきますようお願いいたします。またキャプションを可能な限りご記載いただきますようお願いいたします。
 ※校正ゲラを広報担当までお送りください。

貴社についてお知らせください

○貴社名 _____

○ご担当者名 _____ 様

○ご住所 〒 _____

○Tel _____

○ご掲載・放映の予定日 _____ 月 _____ 日

○媒体名 _____

○所属部署 _____

○Email _____

○Fax _____

<個人情報の取り扱いについて>

ご記入いただきました個人情報は、文化庁メディア芸術祭広報からの情報配信やご案内など必要なご連絡のみ使用いたします。許可なく第三者に個人情報を開示することはいたしません。

広報問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局 広報担当 [hilo Press内] 鎌倉・土井・伊藤

Email : jmaf19-pr@hilopress.net Tel : 03-5577-4792 Fax : 03-6369-3596 ※受付時間 : 平日10時~18時 5/5
 〒101-0047 東京都千代田区内神田 1-18-11-905

平成27年度[第19回] 文化庁メディア芸術祭 マンガ部門 9/9(水)まで作品募集中 審査委員から届いたメッセージをご紹介します。 <http://j-mediaarts.jp>

文化庁メディア芸術祭では、9月9日(水)18:00まで作品を募集しています。

マンガ部門には、ネットや電子媒体による発表形態の多様化に伴い、マンガの可能性を拡張するような作品が多く集まります。審査委員にはマンガ家の犬木加奈子氏、すがやみつる氏のほか、マンガライターの門倉紫麻氏、文学者の古永真一氏、『薫の秘話』でデビュー、近年では『ママゴト』で[第15回・第16回]メディア芸術祭審査委員会推薦作品に選出、また日本漫画家協会賞優秀賞を受賞した松田洋子氏が新たに加わりました。単行本で発行されたマンガ、雑誌等に掲載されたマンガ、ネット上で発表されたマンガ、同人誌等の自主制作のマンガ等、世界に届くパワーあふれる作品の応募をお待ちしています。

平成26年度[第18回]文化庁メディア芸術祭
マンガ部門 新人賞受賞作品

『ちーちゃんはちょっと足りない』

阿部 共実[日本]

成績、お金、恋人、友達……いつも何かが足りない気がする中2女子のちーちゃんとナツ。ある日、ナツとちーちゃんは学校帰りに寄ったお店で、クラスの目立つグループの女子から「万引きしねえ？」と声を掛けられ一。希望と絶望が交錯するナツとちーちゃんを通して、「生きること」が描かれる。



© T.ABE2014

※歴代の受賞作品は、アーカイブサイト (<http://archive.j-mediaarts.jp>) でご確認ください。

※文化庁メディア芸術祭での受賞は、国内外のフェスティバルへの出展や創作活動の支援など、関連事業を通じた新たな活動にもつながります。

広報問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局 広報担当[hilo Press内]鎌倉・土井・伊藤

Email : jmaf19-pr@hilopress.net Tel : 03-5577-4792 Fax : 03-6369-3596 ※受付時間：平日10時～18時

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-18-11-905

審査委員から届いたメッセージ



門倉 紫麻(マンガライター)

アクの強いものも王道のものも等しく「おもしろさ」という基準で評価する、マンガというメディアの懐の深さを感じさせる作品、マンガならではの表現を駆使した作品など、マンガらしいマンガがたくさん集まることを楽しみにしております。



すがや みつる(マンガ家/京都精華大学教授)

メディア芸術祭マンガ部門の審査は、応募されてきた全作品(今回は700作品超)に一通りは目を通すため、大変な労力を要します。しかし、その中には日常のマンガとの接触の中では遭遇できない作品も多く、「旬のマンガ」を知る意味でも貴重な体験となりました。今回も、老眼にムチ打って全作品に目を通す覚悟を固めているところです。幅広いジャンルからの応募をお待ちしています。

古永 真一(文学者/首都大学東京准教授)

私はもともと紙の本が好きなのですが、最近はKindleでマンガを読む機会が増えました。確かに便利で、日常生活において電子書籍が中心になるのも自然な流れかと思います。ただなんと言っても大事なものは、作品のおもしろさです。作品がおもしろければ、紙であれ電子であれ、手にとって読みたくなるものです。今回のメディア芸術祭では、単なるウェルメイドな作品ではなく、優れたマンガに出会えることを楽しみにしています。

■審査委員プロフィール

犬木 加奈子(マンガ家/大阪芸術大学客員教授)

1958年、北海道生まれ。87年に講談社『少女フレンド』増刊号にてデビュー。89年、講談社『サスペンス&ホラー』創刊時より雑誌表紙、巻頭を描き続け、代表作『不思議のたたりちゃん』(講談社、92年～)などを発表。92年には秋田書店、ぶんか社、リイド社、角川書店をはじめホラーマンガ誌が創刊され、それらすべての雑誌表紙、巻頭を担当。また作品がOVA化される。これまでに犬木加奈子漫画賞をはじめ、ホラー誌の選考委員や、漫画の日選考委員、日本漫画家協会賞選考委員を務める。2001年には、第一回日中民間文化交流に参加し北京の中国美術館で作品を展示。08年より大阪芸術大学客員教授。11年にはフランス、13年には銀座のギャラリーなどで展示を行う。14年4月より東京芸術大学講師を務める。同年よりマンガ家活動を再開。

門倉 紫麻(マンガライター)

1970年、神奈川県生まれ。Amazon.co.jp エディターを経て、2003年よりフリーライターに。「FRaU」「ダ・ヴィンチ」「モーニング」「レタスクラブ」などで、主に漫画に関する記事の企画・執筆、漫画家へのインタビュー、コラム連載などを行う。著書に「週刊少年ジャンプ」作家の仕事術取材した『マンガ脳の鍛えかた』(集英社)、宇宙飛行士、宇宙開発関係者に取材した『We are 宇宙兄弟 宇宙飛行士の底力』『We are 宇宙兄弟 宇宙を舞台に活躍する人たち』(モーニング編集部編・講談社+α新書)。またフランスにて、日本のマンガ業界用語を網羅したフランス人マンガファン向けの語学書『LE JAPONAIS DU MANGA』(Misato Raillard との共著・ASSIMIL)を出版。

すがや みつる(マンガ家/京都精華大学教授)

1950年、静岡県生まれ。高校卒業後、マンガ家アシスタント、編集プロダクション勤務などを経て石森プロに所属し、71年、『仮面ライダー』(原作：石ノ森章太郎)にてマンガ家デビュー。児童マンガを中心に活動し、83年、『ゲームセンターあらし』(小学館、80年)、『こんにちはマイコン』(小学館、82年)の2作で第28回小学館漫画賞を受賞。大人向け情報マンガや娯楽小説の分野で活動後、2005年、教育工学を学ぶため早稲田大学人間科学部eスクールに入学。11年、60歳で早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程を修了後、12年より京都精華大学マンガ学部非常勤講師、13年より同大学教授。著書に『仮面ライダー』シリーズ、『一番わかりやすい株入門』(共著、講談社、85年)、『マンガでわかる小説入門』(ダイヤモンド社、05年)、『仮面ライダー青春譜』(ポット出版、11年)などがある。

古永 真一(文学者/首都大学東京准教授)

1967年生まれ。パリ第七大学留学を経て早稲田大学文学研究科博士後期課程修了。首都大学東京准教授(表象文化論)。著書に『ジョルジュ・バタイユ 供犠のヴィジョン』(早稲田大学出版部)、『BD 第九の芸術』(未知谷)、訳書にバタイユ『聖なる陰謀』(共訳、ちくま学芸文庫)、グルンステン『線が顔になるとき』(人文書院)、『イビクス』(国書刊行会)、スクイテン『ラ・ドゥース』(小学館集英社プロダクション)、トッピ『シェヘラザード』(小学館集英社プロダクション)、スクイテン=ペーターズ『闇の国々』(共訳、小学館集英社プロダクション)、マルク=アントワヌ・マチュー『神様降臨』(河出書房新社)、セバスチャン・ロファ『アニメとプロパガンダ』(共訳、法政大学出版局)、グルンステン=ペーターズ『テプフェール』(共訳、法政大学出版局)ほか。

松田 洋子(マンガ家)

1964年、大阪府生まれ、広島県育ち。高校卒業後上京、30歳で漫画家を志す。初めて描いた作品『薫の秘話』が第27回ちばてつや賞大賞を受賞し、95年『モーニング』でデビューする。以降、『秘密の花園結社 リスペクター』『まほおつかいミミッチ』『相羽奈美の犬』などの作品を幅広い作風と媒体で発表し、『赤い文化住宅の初子』は、2007年にタナダユキ監督により実写映画化される。『ママゴト』は、[第15・16回]文化庁メディア芸術祭の審査委員会推薦作品、及び第42回日本漫画家協会賞 優秀賞受賞。現在コミックビームで『私を連れて逃げて、お願い。』連載中。

■マンガ部門 募集概要

マンガ作品

[単行本で発行されたマンガ、雑誌等に掲載されたマンガ(連載中の作品を含む)、
コンピュータや携帯情報端末等で閲覧可能なマンガ、同人誌等の自主制作のマンガ等]

募集期間 2015年7月7日(火)～9月9日(水) 日本時間 18:00 必着

応募条件 ※応募する作品が下記に該当するかを必ず確認の上でご応募ください。

- 2014年9月3日(水)から2015年9月9日(水)までの間に完成した作品、
または、すでに完成してこの期間内に公開された作品。

※更新、リニューアルされた作品で上記期間中に完成、または発表された作品も応募可能です。

※応募する作品数に制限はありませんが、同一の作品を複数の部門に重複して応募することはできません。

- 応募者は作品の著作権を有することが必要です。

代理の方が応募する場合は、必ず著作権者に承諾を得てください。

※応募申込をもって、応募者および作者の同意を得られたものとします。

※募集要項・公式ウェブサイトに記載された応募規定特記を必ずお読みいただき、同意の上でご応募ください。

各 賞

高い芸術性と創造性を基準として、部門ごとに大賞、優秀賞、新人賞を選定します。

また、審査委員会の推薦により、メディア芸術分野に貢献のあった方に対して、功労賞を贈呈します。

メディア芸術祭賞(文部科学大臣賞)

大 賞：賞状、トロフィー、副賞60万円

優 秀 賞：賞状、トロフィー、副賞30万円

新 人 賞：賞状、トロフィー、副賞20万円

功 労 賞：賞状、トロフィー

このほか、優れた作品を審査委員会推薦作品として選定します。

平成27年度[第19回]文化庁メディア芸術祭 開催概要

文化庁メディア芸術祭は、アート、エンターテインメント、アニメーション、マンガの4部門において優れた作品を顕彰するとともに、受賞作品の鑑賞機会を提供するメディア芸術の総合フェスティバルです。昨年度[第18回]は、世界71の国と地域から3,853点に及ぶ作品の応募があり、なかでも国内からの応募数は2,035点と過去最多となりました。文化庁メディア芸術祭は多様化する現代の表現を見据える国際的なフェスティバルへと成長を続けています。

作品募集	2015年7月7日(火)～9月9日(水) 日本時間 18:00 必着
受賞発表	2015年11月下旬
贈呈式	2016年2月2日(火) 会場：国立新美術館(東京・六本木)
受賞作品展	2016年2月3日(水)～2月14日(日) 会場：国立新美術館(東京・六本木) 他 ※国立新美術館は2月9日(火)休館 他会場については決まり次第、フェスティバルサイト等でお知らせします。



昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子



文化庁メディア芸術祭
公式ウェブサイト

<http://j-mediaarts.jp>

フェスティバルサイト

<http://festival.j-mediaarts.jp>

Facebook

<http://www.facebook.com/JapanMediaArtsFestival>

Twitter

@JMediaArtsFes

主催

文化庁メディア芸術祭実行委員会

問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局[CG-ARTS協会内]

E-mail：jmaf@cgarts.or.jp

Tel：03-3535-3501 ※受付時間：平日10時～18時

平成27年度[第19回]文化庁メディア芸術祭
 広報用素材貸出申請書

「第19回文化庁メディア芸術祭」広報用として、下記のデータをご用意しております。貸出をご希望の方は、こちらの申請書に必要な事項と希望素材のアルファベットを○で囲み、文化庁メディア芸術祭事務局広報担当[hilo Press内]までお送り下さい。

<p>[A] ロゴ式(zip) ※使用規定(pdf)同封</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>		<p>[B] ポスター・チラシ画像(zip)</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	
<p>[C] 広報画像(zip)・・・昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品画像[1] - [4].jpg 昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子[5] - [8].jpg ※使用規定(pdf)同封</p>			
<p>[1] アート部門優秀賞</p>  <p>[1] <クレジット> Photo : Keizo Kioku, Courtesy of Creative City Sapporo International Art Festival Executive Committee <キャプション> 第18回文化庁メディア芸術祭 アート部門優秀賞 『センシング・ストリームズー 不可視、不可聴』 坂本 龍一 / 真鍋 大度</p>	<p>[2] エンターテインメント部門大賞</p>  <p>[2] <クレジット> Photo : Google's Niantic Labs <キャプション> 第18回文化庁メディア芸術祭 エンターテインメント部門大賞 『Ingress』 Google's Niantic Labs (創業者 : John HANKE)</p>	<p>[3] アニメーション部門大賞</p>  <p>[3] <クレジット> ©Ural-Cinema <キャプション> 第18回文化庁メディア芸術祭 アニメーション部門大賞 『The Wound』 Anna BUDANOVA</p>	<p>[4] マンガ部門大賞</p>  <p>[4] <クレジット> 近藤ようこ・津原泰水/ KADOKAWA刊 <キャプション> 第18回文化庁メディア 芸術祭マンガ部門大賞 『五色の舟』 近藤 ようこ/原作 : 津原 泰水</p>
<p>[5]</p> 	<p>[6]</p> 	<p>[7]</p> 	<p>[8]</p> 
<p><キャプション/[5] - [8]共通> 昨年度[第18回]文化庁メディア芸術祭受賞作品展の様子 提供 : 文化庁メディア芸術祭事務局</p>			

<広報画像のご使用にあたって>

※広報画像のご使用は「第19回文化庁メディア芸術祭」をご紹介いただく場合に限りさせていただきます。フェスティバル終了後は使用できません。
 ※広報画像[1] - [8]は全国でご使用ください。部分使用や作品に文字や他のイメージを重ねることはお控えください。
 ※指定クレジットを必ずご記載いただきますようお願いいたします。またキャプションを可能な限りご記載いただきますようお願いいたします。
 ※校正ゲラを広報担当までお送りください。

貴社についてお知らせください

○貴社名 _____

○ご担当者名 _____ 様

○ご住所 〒 _____

○Tel _____

○ご掲載・放映の予定日 _____ 月 _____ 日

○媒体名 _____

○所属部署 _____

○Email _____

○Fax _____

<個人情報の取り扱いについて>

ご記入いただきました個人情報は、文化庁メディア芸術祭広報からの情報配信やご案内など必要なご連絡のみ使用いたします。許可なく第三者に個人情報を開示することはいたしません。

広報問合せ先

文化庁メディア芸術祭事務局 広報担当 [hilo Press 内] 鎌倉・土井・伊藤

Email : jmaf19-pr@hilopress.net Tel : 03-5577-4792 Fax : 03-6369-3596 ※受付時間 : 平日10時~18時 5/5
 〒101-0047 東京都千代田区内神田 1-18-11-905